中村欣一郎市長の

山椒（さんしょう）は小粒（こつぶ）でも…

Vol.66

鳥羽スペイン村って？

県外で名刺交換すると「鳥羽ですね、行ったことあります」と言っていただくかたが必ずいます。多くは子どもの頃の遠足や修学旅行で来ていただき、近県ならほぼ100％です。それ以外でも伊勢参宮と合わせて行ったことがあるよというかたが非常に多いです。

そしてその中には、「鳥羽行きました、スペイン村とか…」や「横山展望台とか…」と話す人も何人かいました。「それ志摩市なんだけどなぁ」と心の中で思いつつも、話を合わせることにしています。逆に鳥羽を訪れながら、二見や志摩へ行ったと思い込んでいるかたもいることでしょう。県外から見れば、伊勢志摩は一つで、区別できないのだと思います。それもそのはず、観光客のみなさんは鳥羽市内だけで旅行を完結させよう！と思っているわけでなく、自分たちの旅の目的に合ったところ、魅力的なところに行くわけですから。

私たち地元は行政の線引きで、伊勢志摩の3市1町（鳥羽市・伊勢市・志摩市・南伊勢町）が頭の中にありますが、地域の外から見れば、伊勢湾に突き出たあたりの〝志摩半島〟の認識なのではないでしょうか。例えば、三重から見て、群馬、栃木、茨城がどのへんにあるのかをあまり気にしないのと似ていますよね。

このところ、国への要望や補助事業のエントリーをする際に、鳥羽市単独ではなく伊勢志摩の3市1町で連携して取り組むことが多くなっています。「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり」では、鳥羽市を含む伊勢志摩地域がモデル地域として全11か所のうちの1つに選ばれました。また、海外からの誘客強化としての「フランス訪問事業」や、その名もズバリの「地域一体となった観光地・観光産業の再生・高付加価値化事業」なども伊勢志摩地域で取り組みます。こういった事業では国の審査があったりしますが、それら審査の中では、私たち首長がそろって意気込みを聞かれる機会があります。地域の首長同士がちゃんとコミュニケーションが取れているか、みんなで一体となって地域づくりを目指しているかが評価されるようです。

私たちは、事前に下打ち合わせをして臨んではいないのですが、どの面談でも「この地域は首長のみなさんのつながりが素晴らしいですね」と言われます。そう、伊勢志摩のスペイン村、伊勢志摩の夫婦岩、伊勢志摩のハートの入り江なのです！

観光事業を4首長でPRした時の様子
（左から）上村南伊勢町長、橋爪志摩市長、鈴木伊勢市長、私

イコールパートナーシップ

Vol.149

化粧は女性の身だしなみ？

市民課人権・市民交流係
☎㉕1126

「化粧は女性の身だしなみ」と、耳にしたことはありませんか？女性が化粧をせず素顔でいることはマナー違反なのでしょうか。

メイクは女性だけがするものではありません。近年、美しい肌で印象を良くし、自信をつけたいと、「美肌」に関心のある男性が増えています。そして、コロナ禍をきっかけにリモート勤務やオンライン会議が普及し、画面での顔写りを意識する機会が増えたことで、「健康的な印象を演出したい」とメイクに挑む中高年の男性が増加しています。百貨店には男性用化粧品の専門売り場ができ、肌のお手入れから一歩踏み出す「メンズメイク」が新たなトレンドとして定着しつつあります。また、性別の枠組みにとらわれない化粧品「ジェンダーレスコスメ」も登場しています。

化粧の歴史を振り返ると、平安時代末期、化粧は高い身分や階級を象徴するもので、性別を問わず「白粉を塗り、紅をさし、お歯黒をする」というスタイルが浸透しました。戦国時代や江戸時代には、化粧は武士の身だしなみとして日常的な行為でした。化粧道具を持ち歩き、戦場で勇猛果敢に見えるように白粉や紅を使い、身分を示し、名誉や品位を保つため、化粧をしていました。男性が化粧をしなくなったのは明治維新以降で、長い目で見るとわずかな期間のことなのです。

メイクをする・しないの選択は、性別にとらわれず存在しています。なりたい自分を演出して自分に自信が生まれるなど、メイクが持つ「プラスの力」を活用して、「男性らしさ」や「女性らしさ」ではなく「自分らしさ」を表現し楽しむかたが増えてきています。